

## H30年度継続課題 中間評価(案) 一覧

## 【ソフト分野・中間評価】

(H29採択・2年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	研究継続の妥当性評価(意見)	特記事項	H30委託額(万円)	中間評価(案)*
29-1	—	IV	<b>研究名</b> 自動運転と道の駅を活用した生産空間を支える新たな道路交通施策に関する研究開発  <b>概要</b> 北海道の農林水産業・観光等を担う「生産空間」では、人口減少によって公共交通や物流の維持が著しく困難化している。本研究は、「生産空間」に住み続けられる道路交通環境を目指し、自動運転や道の駅の活用の実装を含む道路交通施策のあり方について研究開発を行うことで、同様の問題に苦しむ全国他地域への貢献を目指す。	室蘭工業大学 准教授 有村 幹治	「新たな道路交通施策」の提案に向けて、評価モデルを構築し、また、市民意見を収集するなどの成果をあげている。しかし、自動運転と道の駅の「両方」を組み込んだ「新たな道路交通施策」の提案内容が曖昧で、それをどのように評価しようとしているのかも明確でないなど課題が多い。このことから、研究計画を修正の上、推進することが妥当であると評価する。	<修正内容> 1. 自動運転と道の駅を組み込んだ「新たな道路交通施策」の姿を明確にすること。ここでは、自動運転および道の駅と「新たな道路交通施策」との関連性を明確にすること。 2. 多くの研究課題を同時並行で実施するのではなく、研究課題を絞り、自動運転および道の駅と「新たな道路交通施策」を中心に据えた研究計画とすること。「オーナーカーへの自動運転システム導入評価」などは、本研究の当初目標との関係性が不明確であり、必ずしも必要ではない。	3,798	C
29-2	—	IV	<b>研究名</b> 対流型地域圏における自動走行システム普及に向けた新たな道路ストック評価手法  <b>概要</b> 中山間地域の人流・物流ネットワークへの自動走行システムの導入・普及を目指し、道の駅を拠点とする自動運転サービスの実用化を目指した実証実験を通じて、自動運転に対応した道路インフラと地域の小さな拠点となり得る道の駅が有すべき機能を明確化し、自動走行対応型道路ネットワーク整備計画の立案と、ストック評価のためのデータプラットフォーム及び自動走行対応型道路の路線計画評価モデルの開発を行う。	東京大学 教授 原田 昇	個別研究項目それぞれに対し着実に検討を進め知見を蓄えるなど成果をあげている。しかし、研究全体を通じて得る道路ストック評価手法を、実務者にもわかりやすく、利用しやすいものとするべきとの指摘があることなどから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<今後の研究計画・方法への指摘事項> 1. 道の駅を拠点とする自動走行サービス等の実装に向けて、実効性のある研究成果となることを期待する。最終的に得られる研究成果が、政策評価や交通計画を担う実務者にとって、わかりやすく、利用しやすいものとなるよう工夫を加えつつ、確実なとりまとめを行っていただきたい。 2. 2つ目の研究項目である「自動走行サービス評価手法」が、個別モデルの集積に終わるのではなく、全体として首尾一貫した評価が実現できるものとなるよう、研究を進めていただきたい。	4,297	B
29-3	1	I	<b>研究名</b> 質の高い交通時代のモビリティの価値の計測手法開発に関する研究  <b>概要</b> 異なる時間価値や時間制約を持つ移動主体が共生する超高齢社会において、交通の時間価値の計測方法を再構築する。この手法を3つの事例研究へ適用し、質の高い交通時代の道路事業の包括的評価手法の有用性についてフィールド実験を通じて検証する。	広島大学 教授 藤原 章正	「交通の時間価値の計測方法の再構築」に向けて、着実に理論研究、事例研究を進め知見を蓄えるなど成果をあげている。しかし、Connected公共交通システムの公道実証実験の確実な実施にやや懸念があるなど課題がみられることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<今後の研究計画・方法への指摘事項> 1. 今後の地元調整等の結果、仮にConnected公共交通システムの公道実証実験が研究期間内に実施されない場合に、どのようにして、これに関わる「交通の時間価値」を計測し当初目標を達成するのかを検討いただきたい。このために必要であれば、研究計画を修正いただきたい。 2. 理論研究、事例研究それぞれの成果を、わかりやすく、体系的にとりまとめていただきたい。また「質の高い交通時代の道路事業の包括的評価手法」について、既存の道路事業の評価手法と比較できる形で、その有用性を示していただくことが望まれる。	4,298	B
29-4	3	I	<b>研究名</b> 観光流動把握を目的とした交通流動推定システムの研究開発  <b>概要</b> 観光流動の把握を主たる目的とし、ETC2.0、携帯電話系データ、経路探索履歴データなど様々なビッグデータを利活用し、観光トリップを主とした都市内の移動に関して、そのトリップパターンおよびトリップチェーン流動を推定するシステムを開発する。	京都大学 教授 宇野 伸宏	都市内の観光流動を対象に、トリップパターン推定モデル、トリップチェーン推定モデルの構築を進めており、交通マネジメント施策の効果把握に向けて成果が期待できることから、現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<参考意見> 1. 構築したトリップパターン推定モデル・トリップチェーン推定モデルと、交通マネジメント施策の効果把握との関係性を明確にし、交通マネジメント施策の評価を進める手順を導くことが望ましい。 2. 交通流動推定システムを用いて効果を検証する交通マネジメント施策について、その対象範囲を明確にしつつ、具体的検討を進めることが望ましい。 3. 本研究開発に関する一連の知見から、観光渋滞対策として、交通マネジメント施策につながる実務上有益な示唆が得られることを期待する。	1,130	A

## (H29採択・1年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	研究継続の妥当性評価（意見）	特記事項	H30 委託額 (万円)	中間評価 (案)*	
29-5	6	I	研究名	交通事故リスクマネジメント手法の研究開発	愛媛大学 教授 吉井 稔雄	交通事故リスク情報提供システムを構築し、複数の都市圏で情報提供実験を進めて成果をあげており、今後の研究の見通しにおいても概ね成果が期待できることから、現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;参考意見&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ナビゲーション以外の情報媒体を介した情報提供の際に、交通事故リスクをどのように提示するか、認知バイアスの可能性がある中でどのようにして望ましい経路選択に導いていくのかに十分留意して、検討を進めることが望ましい。</li> <li>生活道路の交通事故リスク評価手法の高度化に際して、引き続きメッシュ単位の交通事故リスクを用いるのが適切かなど、手法の有用性と限界に十分留意して、具体的検討を進めることが望ましい。</li> </ol>	2,210	A
			概要	ネットワーク有効活用による安全性向上を目的とし、道路通行時における事故の起こしやすさ(以下「交通事故リスク」)を定量的に評価算定する方法を確立した後、同交通事故リスク情報を活用する交通マネジメント手法を提案・実施して、その有効性を示す。					

## (H30採択・1年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	研究継続の妥当性評価（意見）	特記事項	H30 委託額 (万円)	中間評価 (案)*	
30-1	-	IV	研究名	AI技術に基づく短期交通予測手法と総合的な交通需要マネジメントの研究開発	広島大学 准教授 カ石 真	平成30年7月豪雨後の道路交通マネジメントを材料に、交通量等の短期予測モデルのプロトタイプを検討するなど成果をあげており、今後の研究の見通しにおいても成果が期待できることから、現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;参考意見&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>既存の交通行動分析に関する理論と、AIに基づくデータ解析との、棲み分けまたは連動を念頭に置きつつ、検討を進めることが望ましい。</li> <li>研究名にある「総合的」な交通需要マネジメント(あるいは、交通需給マネジメント)に向けて、それを意識するあまり「総花的」な研究にならないよう、また先端的な研究成果が得られるよう、留意いただきたい。</li> <li>多様な交通サービス提供主体間の協調という目標に向けた、交通需要(需給)マネジメント手法の提案に期待する。</li> </ol>	4,769	A
			概要	多様な交通サービス供給主体が協調する交通市場の実現に向けて、その要となる短期交通需要予測技術を開発し、開発した予測技術を下敷きとした総合的な交通需要マネジメント手法を提案する。					
30-2	-	IV	研究名	交通流理論とAI学習による非日常の発見とアラート発信	東北大学 教授 桑原 雅夫	道路損傷や冠水などの非日常の発見、非日常の事前アラート発信、リアルタイム可視化システムの検討それぞれにおいて、貴重な知見が得られており、今後の研究の見通しにおいても成果が期待できることから、現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;参考意見&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>非日常の発見と事前アラートとの間のつながりなど、個別研究項目間の関係を意識しつつ、具体的な検討を進めることが望ましい。</li> </ol>	4,769	A
			概要	交通流理論とAI学習を用いて、移動体データと気象・地形データ等を融合解析し、リアルタイムに非日常の「発見」と「事前アラート発信」を行う手法を開発する。対象とする非日常は災害時の道路損傷、冠水、豪雪、Gridlock等だけでなく、観光地やイベント時の渋滞も含む。					
30-3	-	IV	研究名	学習型モニタリング・交通流動予測に基づく観光渋滞マネジメントに関する研究開発	東京大学大学院 教授 布施 孝志	学習型の交通状態モニタリングシステム、交通流動予測システムの構築を進め成果をあげている。しかし、これらの観測・予測システムと交通流動マネジメントとの間の関係性が明確でないなど課題がみられることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;今後の研究計画・方法への指摘事項&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>交通状態モニタリングシステムおよび交通流動予測システムと、交通流動マネジメントとの関係性を明らかにするとともに、これらを連携させ、一体化した枠組みを明確に示していただきたい。このために必要であれば、研究計画を修正いただきたい。</li> <li>研究対象としている鎌倉の道路交通は、他都市とは異なる性格を有しているため、開発しているシステムの汎用性について確認することが望ましい。</li> <li>エリア内課金など、観光渋滞マネジメント施策につながる実務上有益な示唆が得られることを大いに期待する。</li> </ol>	3,198	B
			概要	交通ビッグデータを活用した学習型の交通状態モニタリング手法及び交通流動予測手法を開発し、両者を統合して高精度化させた上で、エリア内の交通流動を改善するための適応型交通需要マネジメントスキームを構築する。また、提案手法を観光交通インベーション地域等で試行し、実効性の高い渋滞対策等の検討に資する知見を提供する。					

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	研究継続の妥当性評価（意見）	特記事項	H30 委託額 (万円)	中間評価 (案)*				
30-4	9	I	<table border="1"> <tr> <td>研究名</td> <td>QOL に基づく道路事業評価手法の開発とSDGs への貢献評価</td> </tr> <tr> <td>概要</td> <td>従来の経済効率性に基づく費用便益分析を超え、働く世代、高齢者、若者等の買物、通院、観光を含む多様な価値観に基づいた Quality of Life (QOL)の視点に立った道路事業評価手法を構築するとともに、道路事業による国連 Sustainable Development Goals (SDGs)への貢献度を包括的に評価する枠組みを開発する。</td> </tr> </table>	研究名	QOL に基づく道路事業評価手法の開発とSDGs への貢献評価	概要	従来の経済効率性に基づく費用便益分析を超え、働く世代、高齢者、若者等の買物、通院、観光を含む多様な価値観に基づいた Quality of Life (QOL)の視点に立った道路事業評価手法を構築するとともに、道路事業による国連 Sustainable Development Goals (SDGs)への貢献度を包括的に評価する枠組みを開発する。	中部大学 教授 林 良嗣	道路事業とQOLの関係性の整理や価値観データベースの整備に向けたアンケート調査を進め成果をあげている。しかし、研究成果を道路事業評価へどう組み入れていくのかが明確でないなど課題がみられることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;今後の研究計画・方法への指摘事項&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>道路事業評価に QOL や SDGs を具体的かつ定量的に組み込むプロセスの開発に集中して研究を進めていただきたい。このために必要であれば、研究計画を修正いただきたい。</li> <li>「自動運転時代における道路の環境評価」の位置づけや本研究での役割が明確でない。研究遂行の中で必ずしも必要ではないと考えられるため、研究計画を再検討いただきたい。</li> </ol>	1,299	B
研究名	QOL に基づく道路事業評価手法の開発とSDGs への貢献評価											
概要	従来の経済効率性に基づく費用便益分析を超え、働く世代、高齢者、若者等の買物、通院、観光を含む多様な価値観に基づいた Quality of Life (QOL)の視点に立った道路事業評価手法を構築するとともに、道路事業による国連 Sustainable Development Goals (SDGs)への貢献度を包括的に評価する枠組みを開発する。											

※中間評価：研究継続の妥当性評価

A: 現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B: 現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C: 研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D: 中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

【ハード分野・中間評価】

(H29採択・2年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	研究継続の妥当性評価（意見）	特記事項	H30委託額 (万円)	中間評価 (案)*	
29-7	-	IV	研究名	耐候性鋼橋梁の診断・補修技術の高度化についての研究開発	山口大学 教授 麻生 稔彦	腐食予測シミュレーション技術の開発、腐食判定法の高度化、環境に応じた補修方法の検討等、一定の研究成果を上げているが、各研究項目間の関係整理に課題があることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;今後の研究計画・方法への指摘事項&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>各研究開発項目について、相互の関係性とそれらを一体で進めなければならないことの必要性や効果について明確にした上で体系的に研究成果をとりまとめていただきたい。</li> <li>取り組みを予定している研究開発項目をパッケージングした成果の提案にこだわりすぎず、各要素技術について実用化につながる観点でさらに精度向上や改善についても努めていただきたい。</li> </ol>	1,098	B
			概要	本研究開発では、耐候性鋼橋梁の効率的かつ合理的な維持管理を可能とするために、耐候性鋼材の腐食の診断技術および補修技術の体系的な高度化を目的とし、診断補修マニュアルの構築を目指す。これにより、耐候性鋼橋梁の維持管理費の縮減が可能となる。					
29-8	4	I	研究名	部分係数設計に向けた塑性化を考慮した鋼桁設計法の研究開発	長岡技術科学 大学 准教授 宮下 剛	鋼桁の耐荷力実験の実施やデータの蓄積および解析は計画通り順調に進んでいるが、各実験・解析ケースの実施諸条件の整理に課題があることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;今後の研究計画・方法への指摘事項&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>各実験・解析のケースについて、なぜそのような手法や条件を選定したのか、どのような破壊モードを想定したものなのか、設計基準における哲学との関係を明確にするとともに最終成果イメージを見据え、体系的に説明できるようにしていただきたい。</li> <li>構造物の補修・補強を念頭に、耐久性能を考慮した設計法の充実について、引き続き取り組んでいただきたい。</li> <li>部分係数設計法の適用拡大による道路橋示方書のさらなる充実化に向け貢献いただきたい。</li> </ol>	2,396	B
			概要	本研究は、断面の一部塑性化を許容した鋼桁の耐荷力特性を実験および解析により把握することを目的としている。さらに、各国の鋼橋の設計基準を分析し、現在の道路橋示方書では具体的に記述されていない、部材の一部塑性化を考慮した鋼桁の設計法の開発を行う。					

(H29採択・1年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	研究継続の妥当性評価（意見）	特記事項	H30委託額 (万円)	中間評価 (案)*	
29-9	8	II	研究名	リモートセンシング技術を活用した道路土構造物の維持管理の効率化に関する研究開発	東京大学 教授 古関 潤一	SARを活用した道路土構造物の変位計測データの蓄積・分析は、計画通り順調に進んでいるが、最終とりまとめの方向性に課題があることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;今後の研究計画・方法への指摘事項&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>最終成果としての「マニュアル」について、SARというシーズの活用を主眼としたとりまとめ表現となっているが、SARの活用条件を明確化した上で、道路管理者による具体的な活用場面やニーズを主眼とした「マニュアル」としていただきたい。</li> <li>実用に当たっての初期導入コストについても意識し、研究を進めていただきたい。</li> </ol>	1,997	B
			概要	リモートセンシング技術（合成開口レーダー[SAR]）を活用し、広域の道路土構造物の変状（軟弱地盤・スレーキング材料による長期沈下、アンカーのり面・深礎杭の変状、管理外の土石流・地すべりなど）について、過去に遡ってデータベースを作成することにより、劣化しつつある道路土構造物の性能・対策優先度を評価し、道路施設の点検・維持作業の効率化を図る					

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	研究継続の妥当性評価（意見）	特記事項	H30委託額（万円）	中間評価（案）*				
30-5	-	IV	<table border="1"> <tr> <td>研究名</td> <td>道路構造及び空洞特性に適応した陥没危険度評価と合理的路面下空洞対策についての研究開発</td> </tr> <tr> <td>概要</td> <td>路面下空洞の生成要因や拡大過程・陥没危険度を解明し、併せて空洞探査の高度化と空洞特性に応じた適切な補修方法を開発することにより、道路管理者に発信し得る「調査計画・空洞探査・空洞補修に係る一連の合理的プロセス」、即ち道路陥没予防ソリューションを開発する。</td> </tr> </table>	研究名	道路構造及び空洞特性に適応した陥没危険度評価と合理的路面下空洞対策についての研究開発	概要	路面下空洞の生成要因や拡大過程・陥没危険度を解明し、併せて空洞探査の高度化と空洞特性に応じた適切な補修方法を開発することにより、道路管理者に発信し得る「調査計画・空洞探査・空洞補修に係る一連の合理的プロセス」、即ち道路陥没予防ソリューションを開発する。	<p>東京大学 教授 桑野 玲子</p>	道路陥没・路面下空洞の発生メカニズムの解明、危険度評価法の高度化、空洞充填剤の開発着手など、研究開発は計画通り順調に進んでいるが、開発した危険度評価の実地での活用の仕方の提示について課題があることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;今後の研究計画・方法への指摘事項&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>本研究において高度化される路面下空洞の危険度評価について、現場での利活用も想定し、体系的に示していただきたい。</li> <li>埋設物などの局所的な要因が大きく影響する空洞発生について、空洞ポテンシャルマップの有効性や必要性が現段階では不明確である。ポテンシャルマップの作成を主要研究事項とする場合は、実務の中でどのように活用しうるのであるかの観点から必要に応じて改善のうえで進めるとともに、その有効性を明確に示していただきたい。</li> </ol>	1,797	B
研究名	道路構造及び空洞特性に適応した陥没危険度評価と合理的路面下空洞対策についての研究開発											
概要	路面下空洞の生成要因や拡大過程・陥没危険度を解明し、併せて空洞探査の高度化と空洞特性に応じた適切な補修方法を開発することにより、道路管理者に発信し得る「調査計画・空洞探査・空洞補修に係る一連の合理的プロセス」、即ち道路陥没予防ソリューションを開発する。											
30-6	-	IV	<table border="1"> <tr> <td>研究名</td> <td>地方自治体における道路維持管理業務のための道路構造物に関する情報の活用方策</td> </tr> <tr> <td>概要</td> <td>実際の現場での道路維持管理業務そのものの実施体制等や道路構造物に関わる様々なデータ管理の実態を明らかにし、課題を抽出する。その上で、多額の費用を掛けることなく、通常の業務の延長上での道路維持管理業務に関連する各種資料・データを集約し、それらと道路構造物の点検・診断結果等を地理情報システムを用いたデータベースとして構築する方法を具体的に提示する。そして、自治体での実際の導入とその利活用を実証的に検証する。併せて、研究成果活用の継続性の観点から、提示する方策を担う人材育成に関しても実証的に検討する。</td> </tr> </table>	研究名	地方自治体における道路維持管理業務のための道路構造物に関する情報の活用方策	概要	実際の現場での道路維持管理業務そのものの実施体制等や道路構造物に関わる様々なデータ管理の実態を明らかにし、課題を抽出する。その上で、多額の費用を掛けることなく、通常の業務の延長上での道路維持管理業務に関連する各種資料・データを集約し、それらと道路構造物の点検・診断結果等を地理情報システムを用いたデータベースとして構築する方法を具体的に提示する。そして、自治体での実際の導入とその利活用を実証的に検証する。併せて、研究成果活用の継続性の観点から、提示する方策を担う人材育成に関しても実証的に検討する。	<p>筑波大学 教授 堤 盛人</p>	これまでの研究成果が地方自治体におけるインフラ管理の実態把握に留まっており、今後の研究の方向性が不明確であることから、研究計画の再検討が必要である。	<p>&lt;修正内容&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>地方自治体における道路管理について、業務プロセスや人員、組織体制など様々な課題がある中、なぜシステム化できないかを分析するなどし、道路構造物に関する情報利活用の課題を整理するなど、道路管理者が参考とできるような成果が得られるよう研究計画を再構成していただきたい。</li> <li>個別の事例への対応に留まるのではなく、多様な地方自治体で活用できるよう、一般化可能な成果となるよう留意していただきたい。</li> </ol>	910	C
研究名	地方自治体における道路維持管理業務のための道路構造物に関する情報の活用方策											
概要	実際の現場での道路維持管理業務そのものの実施体制等や道路構造物に関わる様々なデータ管理の実態を明らかにし、課題を抽出する。その上で、多額の費用を掛けることなく、通常の業務の延長上での道路維持管理業務に関連する各種資料・データを集約し、それらと道路構造物の点検・診断結果等を地理情報システムを用いたデータベースとして構築する方法を具体的に提示する。そして、自治体での実際の導入とその利活用を実証的に検証する。併せて、研究成果活用の継続性の観点から、提示する方策を担う人材育成に関しても実証的に検討する。											
30-7	4	I	<table border="1"> <tr> <td>研究名</td> <td>養生技術・混和材料を活用した各地域のコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムについての研究開発</td> </tr> <tr> <td>概要</td> <td>東北地方整備局の復興道路の試行工事ですすでに申請者が構築したコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムをベースに、全国の各地域の環境条件、材料事情のもとでの品質・耐久性確保システムを試行工事を通じて構築する。</td> </tr> </table>	研究名	養生技術・混和材料を活用した各地域のコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムについての研究開発	概要	東北地方整備局の復興道路の試行工事ですすでに申請者が構築したコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムをベースに、全国の各地域の環境条件、材料事情のもとでの品質・耐久性確保システムを試行工事を通じて構築する。	<p>横浜国立大学 教授 細田 暁</p>	研究成果が各地域におけるコンクリートの品質に係るマニュアルに反映されるなど、研究は計画通り順調に進んでいるものと考えられるが、全国展開すべき事項の抽出について課題があることから、指摘事項に留意しながら現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;今後の研究計画・方法への指摘事項&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>本研究プロジェクトの範囲内での実施事項および達成目標を明確にし、取り組んでいただきたい。</li> <li>本研究のプロジェクトの成果については、特定の地域での活用の積み上げのみに留まらず、一般化できる事項を整理し、全国共通に活用可能な成果としても仕上げていただきたい。</li> <li>あくまで本研究プロジェクトとして行う部分と他の予算や研究スキームによるものとの区別は明確にするとともに、研究成果の発表や本研究プロジェクトの成果の扱いについては、国総研との委託契約の規程に従うなど、コンプライアンスの確保には特に留意されたい。</li> </ol>	1,799	B
研究名	養生技術・混和材料を活用した各地域のコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムについての研究開発											
概要	東北地方整備局の復興道路の試行工事ですすでに申請者が構築したコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムをベースに、全国の各地域の環境条件、材料事情のもとでの品質・耐久性確保システムを試行工事を通じて構築する。											
30-8	8	II	<table border="1"> <tr> <td>研究名</td> <td>道路土工と舗装の一体型診断システムに基づいた長寿命化修繕方法の開発</td> </tr> <tr> <td>概要</td> <td>舗装表層の供用年数が使用目的年数に満たず早期に劣化が進行し、補修が繰返される区間について、道路管理の観点から、LCC 最小化を目指した、新しい詳細診断システムと抜本的修繕工法を開発を行う</td> </tr> </table>	研究名	道路土工と舗装の一体型診断システムに基づいた長寿命化修繕方法の開発	概要	舗装表層の供用年数が使用目的年数に満たず早期に劣化が進行し、補修が繰返される区間について、道路管理の観点から、LCC 最小化を目指した、新しい詳細診断システムと抜本的修繕工法を開発を行う	<p>岐阜大学 教授 八嶋 厚</p>	点検データの蓄積とデータ解析、試験施工実施および長期計測技術の開発、修繕工法の確認試験の実施など、計画通り順調に進んでおり、現行のとおり推進することが妥当であると評価する。	<p>&lt;参考意見&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>今後、研究の進捗により、舗装と土工一体の調査診断方法と修繕工法が体系的に示され、実用化に結びつけられることを期待する。</li> </ol>	1,791	A
研究名	道路土工と舗装の一体型診断システムに基づいた長寿命化修繕方法の開発											
概要	舗装表層の供用年数が使用目的年数に満たず早期に劣化が進行し、補修が繰返される区間について、道路管理の観点から、LCC 最小化を目指した、新しい詳細診断システムと抜本的修繕工法を開発を行う											

※中間評価：研究継続の妥当性評価

A: 現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B: 現行のとおり推進（指摘事項有り）	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C: 研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D: 中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。